

# 関西学院で学ぶということ

経済学部長 前田高志

皆さんはそれぞれご自身のアイデンティティを持っておられます。アイデンティティとは、皆さんの皆さんたる所以、皆さんを皆さん足らしめるもので、それはこれまでの約二十年の人生の中で築かれてきた大切なものです。その皆さんのアイデンティティを形づくるものに、関西学院、関西学院大学が含まれていくことを、私は強く願うものであります。

それでは、関西学院そのもののアイデンティティとは何なのでしょう。

関学の関学たる所以は、キリスト教主義の精神に基づく教育にあります。今から130年前、ランバース博士は神戸に「人間形成の根本を宗教におき、宗教によってこそ真の人間形成ができるのだという信念に基づく教育をなす学校」として関西学院を創設されました。そして、第2代院長の吉岡美国先生は関西学院の精神、スピリットとして「敬神愛人」という言葉を遺されています。敬神愛人、神を敬い(畏れ)、人を愛する、という言葉は、聖書のマタイによる福音書第22章37～39節の「イエスは言われた。心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。これが最も重要な第一の掟である。」から来ています。「主を畏れる」ことは聖書の中できわめて重要な教えで、たとえば、詩編の第111編10節では「主を畏れることは知恵の初め。これを行う人はすぐれた思慮を得る。」とあります。創造主に対する畏敬は信仰者の基本とされますが、キリスト教信者でなくても、この神を敬い畏れる心というのは重要な意味をもっています。皆さんはいま経済学という社会科学の学問を学ばれています。経済学を学ぶことでこの世界の真理の一部にふれることになるでしょう。しかし、そのことで私たちは驕ってはいけない、私たちはそのことに気づく必要があります。人間の驕りを戒め、人との調和と隣人愛を説く、それが、この「敬神愛人」の精神です。その精神が関学の教育の原点、根幹、礎のひとつなのです。

また、関西学院のスクールモットーのMastery for Serviceは、第4代院長のベーツ先生が1912年4月、新設の高等学部長に就任した直後に提唱されたもので、先生は次のように述べておられます。「人には二つの面があります。一つは個人的で私的な面、もう一つは公的で社会的な面です。……校訓『マスターリー・フォア・サービス』という言葉が意味するのも、人にこの二つの面があるということな

のです。私たちは“弱虫”になることを望みません。私たちは強くあること、

“さまざまなことを自由に支配できる人”(マスター)になることを目指します。……私たちがマスターになるとうする目的は、自分個人を

富ますことでなく、社会に奉仕することにあります。私たちは、広い意味で人類に奉仕する人になることを目指しているのです……。通常、Master(主人)とServant(仕える者)は正反対のイメージとして映りますが、それにもかかわらず、サーヴァントこそ実は本当のマスターであるということをベーツ先生は説かれました。大学で学ぶことは個人の栄達のためではなく、社会への貢献、世に尽くすことであるという精神、関西学院はこの精神のもとにつくられ、130年の間、存続してきたのです。

こうした関学を支える精神、それこそが関西学院のアイデンティティです。皆さんは、関西学院大学を選ばれました。なぜ、関西学院を選ばれたのでしょうか。いろいろな理由があると思いますが、関西学院大学が発する雰囲気、空気にひかれて、という方も多いと思います。実はその皆さんが感じておられる関学の雰囲気は、130年の間、こうした関西学院大学の創設、草創期から引き継ぐ精神によって培われてきたものです。

そして、その精神を引き継ぐものとして、皆さんはここにおられる、そのことを覚えて、学問と自己の研鑽に励んで頂きたいと私は願っております。キリスト教主義の関学の精神にふれながら、自分自身をしっかりと見つめて頂きたいと思います。そして、経済学という学問、ツールによってこの世界の真実にふれるように努めて下さい。

そうすれば、皆さんのアイデンティティに関西学院大学が加わるのが確かな意味をもち、皆さんがこの大学から世に出て行かれるとき、関西学院大学に学んで本当に良かったと思って頂ける、私はそのように確信いたしております。

